オンライン授業用教材開発に向けての現状分析

―日本語中級インターアクション科目を対象として―

藤岡亮子

【キーワード】教材開発、オンライン授業、インターアクション、日本語中級、交換留学

1.　問題と目的

本稿は、2020 年度春学期における本学留学生別科インターアクションプログラム「インターアクション 4」の現状分析を行った結果を報告するものである。

当プログラムは、本学国際協定校に在籍し、交換留学制度を利用して入学する留学生を対象にしたもので、「インターアクション」は必修科目の一つとなっている。本科目では、ネウストプニー（1995）提唱の「インターアクションのための日本語教育」の理念を出発点とし、学習者が遭遇するであろう日本語話者との接触場面で必要とされる「言語能力」「社会言語能力」「社会文化能力」などを身につけ、場面に適した日本語の運用ができるようになることを目指している。授業内容は、日本語を使ったインターアクションのための「理解」、「準備」と「練習」に加え、カリキュラムに本当の場面を組み込んで実際の日本語使用を促す「パフォーマンス・アクティビティ／以下 PA と略記」も取り入れた構成となっている。

筆者は 2020 年度春学期に本科目を担当したが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大に伴い、本学はその対策として 4 月 27 日を授業開始日としてインターネットを利用したオンライン授業を実施することが決定された。オンライン授業によるインターアクション教育の試みは今回が初めてであり、実践を重ねるうちに新たな可能性や課題が見えてきた。今後は、新型コロナウイルス感染症の影響が長期化した場合の措置として、学生が自国にいながら受講する、新たなオンライン授業の構築のための教材開発が求められる。そのため、まず 2020 年度春学期授業の取り組みを記録することに意義があるものと考え、教育実践を報告する。次に、実践と学生に対するアンケート調査の結果をもとにクラスの現状を分析し、今後におけるオンライン授業充実のための教材の可能性と課題を明確にし、教材開発に資することを目的とする。

2.　先行研究・先行事例

2-1　教材開発のプロセス

教育学全般において「教材」は、「教員」「学習者」と並び、授業を構成する 3 要素の 1

つである（砂沢 1979）。また、教材は、教授法の変化や教育工学の進展に関わらず、今もなお言語教育の中核であり続けている（Garton and Graves 2014）。

外国語教育における教材開発の研究には、Jolly and Bolitho（1998）、Tomlinson（1998、2003） などがあり、教材開発のプロセスや枠組みが示されている。Jolly and Bolitho（1998）は、教材を執筆する際のプロセスを簡素化して、以下のようにまとめている。

(1) 教師や学習者のニーズ（及び課題）の特定
(2) ニーズの検討（具体的にどのような言語項目や機能を盛り込むかなど）
(3) 教材の文脈化・具体化
(4) 教材の教育的具現化（適した練習、活動などの検討）
(5) 教材の開発
…実際の教育現場で教材の使用…
(6) 教材の目標到達に対する評価

また、効果的なカリキュラムや教材を開発するために、コースデザイン論ではニーズ分析の必要性が論じられている。特に特化目的の英語教育（English for Specific Purposes: ESP）の分野においては、古くからニーズ分析が行われている。このように、新たに教材開発をしようとする場合や教材のさらなる発展を目指す場合には、学習者や教師のニーズ、課題など現状を分析し、教材開発に繋げることが必須である。

2-2 日本語によるインターアクション教育

ネウストプニー（1995）は、「インターアクション教育」の重要性を指摘している。人間の行動の目標はコミュニケーションそのものを目的としているのではなく、社会・文化・経済などの実質的な行動を基盤に持ち、コミュニケーションはそのための手段である。したがって、現代社会における日本語教育は、単なる語学教育では十分でなく、インターアクション（言語能力、社会言語能力、社会文化能力）教育が必要不可欠であるという。

授業の特徴を挙げると、カリキュラムに学習者と母語話者が実際に日本語を使用するアクティビティを取り入れ、そこでインターアクションを実行するために準備や練習が行われる点にある。現在では、吉田ほか（2014）のように、最初に場面に必要な社会文化的項目、社会言語的項目、言語的項目について気づいたことを話し合い、次に準備、練習をし、インターアクションを経験して振り返りを行うという流れで実践している例がある。この一連の活動を繰り返し行い、教室内外でのインターアクションを促すことによって、学習者が自身の生活と結びつけられるようになり、インターアクション能力の獲得が可能になると考えられる。ネウストプニー（1995）によって提唱されたインターアクション教育は、今では数多くの研究や実践がなされるようになった（村岡 1992、2003；横須賀 2003；中井 2012 など）。

本学での実践から教材開発について報告したものには、菊池（2009）や細井（2009）がある。また、初級レベルと初中級レベル向け教科書が出版されている（上原・菊池 2014；吉田ほか 2014）。

菊池（2009）は、短期交換留学生向け初級テキスト作成にあたり、日本で学習する利点

を授業の中で最大限生かすことを目指し、シラバス設計を行っている。日本で経験する身近なことや日本文化・日本人の思考についてのトピックを取り上げ、それに関連するインターアクションが可能なアクティビティーであること、語彙や文法項目が日本語学習の基礎的な系統性に沿ったものであることが求められると述べている(下線部:原文の儘引用)。

細井（2009）は、短期交換留学生向け中級教材作成にあたり、日常レベルのインターアクションからアカデミックレベルのインターアクションへ、学習者個人の興味から日本での日常生活、社会問題へという流れでシラバスを設計している。また、学外活動の一部をシラバスに組み込み、小学校を訪問するために「日本の教育」を、ごみ処理施設見学のために「環境問題」をトピックとして取り上げている。

吉田ほか（2014）は、初級後半から中級レベルの学生を対象とした教科書を開発し、日本の留学生活に必要な「日本語で自己紹介をする」「メールで連絡をする」「活動やイベントを見学する」など 10 場面を取り上げている。教室の中と外を繋ぐ活動を取り入れ、学習者が自ら学習したことと実際の生活を結びつけ、自信を持ってインターアクションができるようになることを目指している。

いずれの先行事例も、学内外の活動や日本での実生活と有機的に関連づけ、交換留学の意義を重視したシラバス設計となっている。これまでの報告を踏まえ、今学期の実践例を次に提示する。

3. 授業の実践

今学期は、コロナ禍で授業環境が大きく変更となり、先行事例の要素にオンライン授業の要素が加わり、オンライン授業でも実施可能な PA を行うことを前提にシラバスを設計した。また、日本政府から本県を含む 7 都府県に緊急事態宣言が発令され、外出自粛要請により学生の日本語使用場面にも変更が生じていることも考慮しつつ、学生が日本での留学生活の意義を見出せる授業内容を模索した。

3-1 クラスの概要

学生は、本学留学生別科の交換留学生でレベル 4 在籍の 10 名であった。留学期間は半年または 1 年間で、先学期からの継続生が 7 名、4 月からの新入生が 3 名である。このクラスの日本語能力は、CEFR A2～B1.1 相当である。学生の専門は、日本語、日本・アジア関係、言語学、数学、生物学など様々である。

表 1 は、当該クラスの開講科目一覧である。「インターアクション 4」は必修科目の 1 つであり、学生は週に 3 コマ履修する。これに併行して、文法読解、語彙漢字、作文、選択科目を履修する。ほかに、今学期の小学校訪問や高校訪問といった行事は、新型コロナ感染症拡大の影響に伴い、全て中止となっている。

表 1 当該クラスの開講科目一覧

必修科目（週当たりのコマ数）	選択科目（週当たりのコマ数）
インターアクション 4（3 コマ） 文法読解 4（3 コマ）	自律学習 4・5・6（1 コマ） 初級文法演習 3・4（1 コマ）

語彙漢字 3／4（1 コマ） 作文 4（1 コマ）	中級文法演習 4・5（1 コマ） 口頭表現 4・5（1 コマ） 文章表現 4・5（1 コマ） 発音 3・4（1 コマ） 読む 3・4（1 コマ） 社会文化入門 1・2・3・4（1 コマ） 社会言語学（1 コマ） ビジネス文化入門 4・5（1 コマ） 社会文化入門 4・5（1 コマ）

3-2　授業の概要

(1)　日時・期間：2020 年 4 月 27 日（月）～7 月 24 日（金）
授業 1 回 90 分、週 3 回実施（計 39 回）

(2)　場所・方法：

学生の受講場所は、日本国内のアパート等であった。なお、本県では 5 月 25 日まで外出自粛が要請されていたため、学生も不要不急の外出を控え、新しい生活様式が求められていた。

授業はオンライン会議システム「Zoom」を用いて、主に同時双方向型授業で実施した。この科目は、学生同士でのやり取り、意見交換などを行う機会が多いためである。学生はオンライン授業を受講するにあたり、自身で機器を準備するか別科から貸与された機器を使用した。学期中、ノート型パソコン（9 名）、タブレット型パソコン（1 名）を使用して受講した。

(3)　授業の目標：

1 章で述べたインターアクション能力の養成を目指す。学生向けには、授業の内容は自分の興味のある話題から社会問題まで、やや複雑なコミュニケーションができるレベルを扱うことを補足説明している。

(4)　使用教材：

指定教科書はなく、講師作成の配布資料（PowerPoint による提示資料、Google ドキュメントなど）、動画、生教材を使用した。配布資料は、Google Classroom で閲覧できるようにし、PDF 資料をダウンロード可能にした。

(5)　シラバス・カリキュラム：

過去の授業報告、及びオンライン授業への変更を踏まえ、今学期は表 2 のように設計した。トピックは身近な話題から個人的に関心のある社会問題へ、PA は学生の心理的負担を考慮し、時間を 10 分から始め段階的に長くし、活動形態も留学生同士から始め、次に留学生 3～4 名対ビジター1～2 名のグループ、最終 PA では 1 対 1 で実践し、できるだけ易から難へと移行するようにした（表 2　TOPIC3～7 参照）。なお、今学期はコロナ禍でのオンライン授業実施という緊急措置であったため、平時と異なるトピックや内容で例外的に一部実施したため、表中の右欄には当初予定していた対面授業からの変更点も示している。

表 2　2020 年度春学期インターアクション 4 クラスのシラバス・カリキュラム

日時	TOPIC PA の内容（1 人当たりの時間） 【グループ：留学生／ビジター】	当初の予定からの変更点とその理由
4/27・28・5/1 （3 回）	オリエンテーション 1：大学生活を紹介する クラスメートに自身の大学生活を紹介する（10 分）	・オンライン授業に慣れるための助走期間として位置づけることとした。 ・インターアクション相手をビジターではなく、クラスメートに変更し、クラスメートとの関係構築を優先した。
5/4・5・8 （3 回）	2：メールや SNS で連絡をする 日本語学習パートナーなどの友人に近況を知らせる 【留学生 1 名／大学生 1 名】	当初の場面設定は「先生に依頼のメールを送る」であったが、継続生が多く先学期既習であること、新入生は全員が日本語学習パートナーに参加予定であること、このクラスは産出科目の「書く」「話す」が複数設置されていることを総合的に考慮し、変更した。
5/11・12・15・18・19・22 （6 回）	3：母語を伝え合う グループの仲間と母語の特徴を紹介し合う（10 分） 【留学生 3、4 名／大学生 2 名】	PA の準備に時間を要するため、期間を長めに設定した。
5/25・26・29・6/1・2・5・8・9・12 （9 回）	4：私が見つけた日本を語る 日本に来て発見した日本の文化や習慣をスピーチする（10 分） 【留学生 3、4 名／大学生 1、2 名】	街中で素材を収集する活動が入るため、実施時期を慎重に検討し、外出自粛要請解除後に行った。また、過去に撮影した写真を用いても良いこととした。
6/15・16・19・22・23・26・29・30 （8 回）	5：社会問題について話し合う グループで教育問題についてディスカッションする（15 分 2 回） 【留学生 2 名／大学生 1 名】	・高校訪問の行事が中止となったため、高校生との交流でなく同じ年齢層の大学生と身近な教育問題についてディスカッションとした。 ・活動に入る前に、動機づけと背景知識を活性化させるためにゲスト講師（本学の卒業生で日本語講師）による大学生活の紹介を行った。
7/3・6・7・10・13・14・17・20・21・24 （10 回）	6：将来の夢やキャリアプランを聞く 自国の先輩と日本の人にインタビューする【留学生 1 名／各 1 名】	・「自国の先輩」は日本滞在者に限らず自国にいる大学等の先輩でも可とし、オンラインでインタビューした。 ・インタビューを記事にまとめて、クラスで報告会を行った。

(6)　各トピックの授業の流れ：

ネウストプニー（1995）の理論、吉田ほか（2014）を参考に、以下の 4 段階で行った。なお、各段階の具体例は、次の 3-3 に示すこととする。

①考える

提示された場面について、言語面・社会言語学的内容・社会文化的内容に関して気づいたことを自由に話し合う。

②準備・練習する

PA 本番に向けて準備をする。例示の表現を身につけたり自分らしい表現を検討したりし、自身のインターアクションを準備し、リハーサルを行う。

③PA を経験する

授業内で実際場面または実際に近い場面のインターアクションを経験する。学生は自身のインターアクションを録音する。

④PA を振り返る

自身またはクラスメートのインターアクションについて、録音データ及び振り返りシートを使って内省を行う。最後にクラス全体で振り返りをし、今後の生活の中での使用に結びつける。

図 1　各トピックの授業の流れ

この過程を繰り返し行うことにより、学生がインターアクション能力を自然と身につけ､実生活の様々な場面で主体的に参加できるようになることをねらいとしている。

(7)　評価：

出席・授業の参加度…20％、課題・宿題（PA 準備を含む）…40％、PA…40%

3-3　授業例

TOPIC3「母語を伝え合う」（計 6 回）の授業を一例として、以下に授業日程、学生の発表スライド、振り返りシートを提示する。

表 3　TOPIC3 の授業日程

<table>
<tr><th>授業回</th><th>実施日</th><th>活動内容</th></tr>
<tr><td>1</td><td>5/11</td><td>①考える
1) 教師はトピックの「母語を紹介する」場面を Zoom の画面共有機能を利用して PowerPoint を提示し、学習の動機づけと学習項目への気づきを促す。学習者は自身のこれまでの経験を振り返り、上手くいった経験や困った経験について自由に話し合い、学習内容を身近に感じたり学習や活動に参加する必要性を認識したりする。
2) PA 準備に向けて、まずクラス全体で日本語の特徴を共有する。</td></tr>
<tr><td>2</td><td>5/12</td><td rowspan="3">②準備・練習
1) 教師は PowerPoint で資料を提示し、PA の課題を説明する。
2) グループで母語の特徴を話し合い、ワークシートに記入する。
グループ編成は同じ母語の学生または同じ地域の学生とした。
3) 学生各自、紹介したい項目をメモする。
4) 話す内容をメモし、必要に応じて写真やスライドを準備する。例示の表現を身につけたり自分らしい表現を検討したりし、自身のインターアクションを整理する。早く完成した学生からペアでメモやスライドをチェックし合う。最後に教師によるチェックを行う。
5) PA 本番の一連の流れを Zoom のブレイクアウトルームを利用し、小グループ（学生 ABC／学生 DEF／学生 GHIJ）でリハーサルしてみる。終了後、学生同士で評価シートの項目に沿って助言し合う。その後、教師がクラス全体に対し全員共通の確認事項を補足する。</td></tr>
<tr><td>3</td><td>5/15</td></tr>
<tr><td>4</td><td>5/18</td></tr>
<tr><td>5</td><td>5/19</td><td>③PA を経験する
1) 授業にビジターを招き、Zoom のブレイクアウトルーム内でグループのメンバー同士で母語を紹介し合う。学生は自身の声を録音する。（学生 ADG／学生 BEH／学生 CFIJ、ビジター各グループ 2 名）
2) 教師は各グループを巡回する。その際、できるだけ観察に徹し、学生がどうしても困っている場合やグループで話し合いが進まない場合のみ助言をする。観察時は、振り返りの時に適切なフィードバックが行えるように振り返りシートや評価の観点に基づき、メモを取る。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>5/22</td><td>④PA を振り返る
自身の録音データを聞いて「振り返りシート」に PA の評価や感想を記入し、内省を行う。最後に、クラス全体で感想や課題の共有を行い、教師は学生に今後の生活の中での使用を促し、教室の中から外への橋渡しをする。</td></tr>
</table>

図 2　学生 A の発表スライド「スペイン語の紹介」

・出来たことは自分の言いたかったことを伝えられました。しかし、内容の範囲はまだ狭かったと思いました。
・難しい事が説明できたのに、時々難しい単語を忘れてしまいました。面白いことを難なく説明できました。文法もうだいたい正しいですが、間違っているところもありました。
・今度、友達の発表に問題やコメントをする。
・もっと分かりやすく説明したいものだ
・私の発表はちょっと難しい過ぎだと思いました。もっと簡単なものを入れたほうがいいかもしれない。例えば一緒に xx 語の言葉を言います。
・発表の時、ちょっと緊張して日本語の発音が間違えるところがあります。よく話せるため、もっと頑張らなければなりません。
・皆を楽しませて、新しいことを教えることができましが、時々スクリプトから読んでしまいました。それに、思ったより時間かかりました。
（以上、原文の儘引用）

図 3　TOPIC3 振り返りシートの感想一覧

4.　学生アンケート調査の結果

今学期の授業に関して､学生が授業活動をどのように感じているのかを把握するために、授業の最終週に学生に Google フォームを使ってアンケート調査を実施した。回答は 6 名から得られた。質問項目は授業の活動内容・各トピック・オンライン授業などに関して、回答形式は多肢選択式と自由記述式とした。多肢選択式の回答は、5 段階（「1:そう思わない」から「5:そう思う」）で記入とした。なお、回答人数が多くないため、各回答人数の数値をそのまま分析することとする。

4-1　授業全体について

表 4 は、授業全体についての項目を取り上げてまとめたものである。回答の数値を見ると、授業のレベルや進度、使用教材について概ね良いと感じ、日本語の上達を感じていることが確認できた。

表 4　授業全体の回答（単位：人）

質問項目	1	2	3	4	5
この授業の日本語や内容は、ちょうど良いレベルでした	0	0	0	3	3
授業の進み方はちょうどいい早さでした	0	0	0	4	2
教科書や先生が授業で使うものはちょうど良かったです	0	0	0	2	4
この授業で日本語が上手になったと思います	0	0	0	2	4

4-2　各トピックについて

トピックごとの満足度を詳しく見ると、ばらつきがあるものの、5 段階評価の 3〜5 の範囲で回答され全体的に高い数値が出ており、満足度の高さを示す結果であった。全体の中で、評価が低かったのはトピック 6 である。1 名から「学期の終わりに帰国の準備をしなければならないので、人をインタビューするのはとても大変です」という声があり、実施時期や課題の内容に関して、オンライン授業による影響や学生の意見も考慮しながら慎重に判断する必要があるだろう。

この設問の最後に「どんなトピックや内容があったらいいか」を問うと、5 名から意見があった。以下に、学生の意見を原文の儘引用する。

「現在の日本語」

「会社や他のフォーマル会話かもしれません。」

「トピックではないけど、たぶん友達と話す日本語をもっと勉強したかった。」

「日本で好きな思い出がいいと思います。」

「オンライン授業になったので、日本人と話すきっかけがほとんどなくなりました。この場合には、日本人の態度について、授業があったらいいと思います。」

とあり、インターアクションの参加者に関するもの、トピックに関するものが挙げられた。レベル 4 になると、インターアクションの相手や場面、会話の種類に関して選択肢が広がる。今学期は、同世代の学生を中心にして活動形態を操作する措置を取り、やむを得ない面もあったが、今後は、学生の自国での実際の日本語接触場面や学習の動機づけなどを考慮して、学生に必要な参加者・場面を設定できるように整備する必要がある。

4-3　オンライン授業について

アンケートの最後に、オンライン授業に変更になったことによる学生への影響を見ていくこととする。

まず、授業開始前の 2020 年 4 月時点でのオンライン授業に対する事前知識等に関する質問への回答である。「オンライン授業についてどんなものか知っていましたか」という質問に対し、「よく知っている」が 3 名、「言葉を聞いたことがある」が 2 名、「いいえ、知らない」が 1 名であった。過去にオンライン授業を受講したことのある学生はいなかった。コ

ンピュータの使用は、得意あるいは普通と回答した学生が多かった。オンライン授業に対し、「不安は感じなかった」が 3 名、「あまり不安は感じなかった」「まあまあ不安を感じた」「不安を感じた」が各 1 名であった。

次に、授業期間中に関する質問への回答である。インターネットの接続環境は「良かった」「まあまあ良かった」という学生が多く、オンライン授業にスムーズに参加できた学生が多数であった。オンライン授業用ツール（Zoom、Google Classroom）も概ねスムーズに使用できたということであった。

「この科目について、オンライン授業でどんな授業を受けたいか、どんな課題・活動をしたいか」という質問に対する回答を見てみると、

「オンラインなら、Zoom で日本人と話すのは大切だと思います。」

「私はディスカッションの活動をしたいと思う」

という意見があり、このインターアクション科目での日本語の使用機会が重要だと感じていることが窺える。

授業でやり取り中心のトピックも幾つか扱っているが、

「私にとって、プレゼンテーションはいつも緊張していて、トピック別のフリートーキングみたいな会話をやってみたいと思います。しかし、これはオンライン授業にできないと思う。」

という声もあった。Web 会議ツールとしての Zoom を自然な会話のやり取りに使用してみると、対面時のコミュニケーションと比べ、やや違和感や即時応答の不自由さが生じる。今後オンライン授業の充実を図るにあたり、活動形態の再考と使用機器の機能面で改善可能な面を検討することも必要である。

「この科目について、自身はどの授業が合っているか」を問うと、論じるまでもなく、対面型授業あるいはリアルタイム型を望む声が多かった。この科目の特性を理解した上での回答のほか、長時間のオンライン学習による疲労を経験して出された回答の可能性も考えられる。

以上、学生へのアンケート調査の結果からは、授業全体に対して概ね肯定的な評価が得られ、オンライン授業への移行による心理的影響は比較的小さかったことが示された。但し、オンラインによる授業内容に関しては課題もあり、アンケートへの意見のほか、授業時の学生の声も参考にしながら改善に繋げたい。

5. 教材開発のための現状分析

今回の授業実践、及び学生アンケート調査の結果を参考に、今後の教材開発に向けて「学生」「教師」「教材」の 3 要素について現状を分析し、教材の可能性と課題を整理する。

5-1 学生の授業環境の変更

今学期は、学生にとっては留学ながら外出自粛要請を受けて自宅中心の生活になったが、学生・教師共に同じ日本国内という環境で授業が可能であった。今後は、新型コロナウイルス感染症の影響が長期化した場合を想定し、教師は変わらず目標言語の国から、学生は

自国にいながら受講するという「オンライン留学」と言われるような形態を想定した教材開発が求められる。

海外の環境では日本語接触場面が限定的であり、さらに新型コロナウイルス感染症拡大の状況下では対面での日本語使用の減少が予想される。しかしながら、学習者が日本語を使ってインターアクションすることの喜びや達成感を得て学習の動機づけを高めるためには、今後もオンラインを利用したビジターセッションの活用が有効であると考える。1 学期間オンライン授業を継続するような場合には、カリキュラムとインターアクション相手の条件が整えばトピック数を 1、2 程度増やし、インターアクションの量を増やすとさらに学習意欲の維持に繋がるであろう。

学生の授業環境の変更に伴い、トピックの内容や方法も一部変更する必要が生じる。コロナ禍で不透明な状況においては、中長期的視点で教育を見据え、学生の自国での実生活に直結した場面と共に将来の来日場面と両方の接触場面を教材に盛り込む方法が考えられる。なお今後目標言語に関する詳細な調査が必要であるが、オンラインを活用した実践的なアクティビティとして大学紹介・ホームステイの疑似体験など、新たな取り組みも可能である。

5-2　教師の役割

この科目における教師の役割は、平常時の対面型授業と特別措置時のオンライン授業という授業形態に関わらず、コースの設計者とファシリテーターの 2 点に集約できると言える。コースの設計者は、ニーズ調査に始まり、学習者がインターアクション能力を身につけられるようにするためにカリキュラム及びシラバスを綿密に設計し、各授業を計画、実行し評価する役割を果たす。ファシリテーターとしての役割は、学生が課題を達成できるように活動を促したり内省を促すためにフィードバックを行ったりすること、学生とビジターのインターアクションが活性化するように支援することが求められる。

今学期を振り返ると、Zoom を用いたオンライン授業では、全員が教室に集まって行う対面型授業と同様に学習を支援することが物理的に難しい面があった。今後は個別相談やグループでの相談時間をより多く設け、全体に占める各授業活動の質・量もバランスを調整しつつ見直しを図る必要があろう。さらに、今後の中長期にわたる遠隔教育に備えて、クラス全体の動機づけを強化することや学習支援が多く必要な学生に対して十分な機会が提供できるように検討しなければならない。

このほか、教育実践を支えるためのインターアクション教育における教師の役割理論に関する研究は数少なく、教師が理論と現場の往還をし続け両者を繋ぎ、実践データを蓄積していくことも重要である。

5-3　教材に必要な要素

本科目の当該レベルは現在指定教科書がなく、これまで教師自作の配布資料を用いてきた。オンライン授業への移行により、今学期からオンライン授業用の教科書を作製し使用することが望ましかったが、教材整備の期間が限られ、従来の配布資料を教科書として代替するに留まった。

今回の配布資料はオンライン授業用教科書としての機能は十分果たせなかったが、Tomlinson（1998）の「教材ができること」の基準に当てはめると、教材は学習者に「情報を与える」「学習の指示をする」「言語使用の経験をさせる」といった点は反映させることができたと思われる。とはいえ、これだけでは無論十分ではなく、「教材は学習の動機づけ及び刺激になること」（Dudley-Evans and St. John 1998）がオンライン授業ではより重要であったと考える。学生が一定期間自宅で一人受講するオンライン授業は、学習意欲の継続が困難な場合が見られ、教師が遠隔で学習支援を行う難しさもあり、教材に学び続けたくなる要素を盛り込むべきである。教材開発論をはじめ、教育工学におけるオンライン授業や E-learning の設計、学習心理学といった各分野の知見を参照しつつ、教科書開発やその他 Web 上ツール開発に積極的に応用していくことが必須である。これらについての検討は、今後の課題としたい。

併せて、インターアクション科目の動機づけに限って言えば、科目の特色でもある「社会言語能力」「社会文化能力」に関連した学習項目は学生の関心も高く、学習意欲を高める要素となり得ると考えられ、教材での扱い方を工夫し教育効果を高めていきたいと考える。

6. まとめ

今回、2020 年度春学期授業の実践報告とクラスの現状分析で、今後の教材開発における可能性と課題が以下のように明確になった。

① 学生の授業環境の変更に伴い、トピックに関して一部修正が必要である。

② オンライン授業においても、教師はコースの設計者及びファシリテーターとしての役割は変わらないが、学習支援の工夫と動機づけの強化が求められる。

③ オンライン授業用教材に学習動機を高める要素を盛り込むことが必須である。

④ 社会言語能力や社会文化能力に関連した学習項目の教材への取り入れ方を工夫し、学習意欲の向上に役立てる。

以上を踏まえて、日本語中級インターアクション科目のオンライン授業の充実を図ると共に教材の可能性を最大限引き出すべく、今後さらなる検討を重ねていきたい。

参考文献

(1) 上原由美子・菊池民子（2014）『NIHONGO ACTIVE TALK The First Japanese Textbook for Beginners』アスク出版

(2) 菊池民子（2009）「初級テキスト「実践日本語 1」の開発：入門期日本語学習者のインターアクション能力習得を目指して」『異文化コミュニケーション研究』21 号、61-76.

(3) 砂沢喜代次（1979）「授業」細谷俊夫・河野重男・奥田真丈・今野喜清（編）『教育学大事典 3』第一法規出版、329-333.

(4) 中井陽子（2012）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房

(5) ネウストプニー、J.V.（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店

(6) 細井和代（2009）「インターアクション能力の習得を目指す複合型授業：中級日本語クラスの教材開発と実践」『異文化コミュニケーション研究』21 号、77-98.

(7) 村岡英裕（1992）「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：「ビジターセッション」場面の分析」『世界の日本語教育』第 2 号、115-127.

(8) 村岡英裕（2003）「アクティビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために—」宮崎里司・ヘレン・マリオット（編）『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』第三部 3-1、明治書院、245-259.

(9) 横須賀柳子（2003）「ビジターセッション活動の意義とデザイン」宮崎里司・ヘレン・マリオット（編）『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』第三部 3-7、明治書院、335-352.

(10) 吉田千春（編著）・武田誠・徳永あかね・山田悦子（2014）『日本語でインターアクション』サウクエン・ファン（監修）、凡人社

(11) Dudley-Evans, T., & St. John（1998）*Developments in English for specific purposes: A Multi-Disciplinary approach.* Cambridge University Press.

(12) Garton, S., & Graves, K.（eds.）（2014）*International perspectives on materials in ELT.* Palgrave Macmillan.

(13) Jolly, D. & Bolitho, R.（1998）A framework for materials writing, In B. Tomlinson (ed.), *Materials Development in Language Teaching.* Cambridge University Press, pp.90-115.

(14) Tomlinson, B. （1998） *Materials development in language teaching.* Cambridge University Press.

(15) Tomlinson, B.（2003）Developing principled frameworks for materials development. In B. Tomlinson （Ed.）, *Developing Materials for Language Teaching.* Continuum. pp.107-129.